

世界観・価値観とのつきあい方を問題化する『源氏物語』教材の開発に向けて
—夕霧と雲居雁夫婦の語られ方を通して—

Developing teaching materials using *the Tale of Genji*:
Focusing on "points of view" and "ways of thinking"

村山 太郎

MURAYAMA, Taro

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第5号 2020年

【原著論文】

世界観・価値観とのつきあい方を問題化する『源氏物語』教材の開発に向けて
—夕霧と雲居雁夫婦の語られ方を通して—

Developing teaching materials using *the Tale of Genji*:
Focusing on "points of view" and "ways of thinking"

村山 太郎*

MURAYAMA, Taro*

要旨

学習指導要領改訂（2017-2018年）に伴って高等学校国語科では「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」の育成という目標が掲げられた。この目標を踏まえた国語の学習はどのようなものがあり得るのだろうか。本稿は、「言葉による見方・考え方を働かせ」という用語に着目しつつ、『源氏物語』テキストにおける夕霧と雲居雁夫婦の物語を取り上げ、夕霧の在り方に着目して分析し、具体的な教材開発に資する要点を明らかにすることで、この問いに答える端緒を示そうとするものである。

キーワード：新学習指導要領 言葉による「見方・考え方」 古文学習 『源氏物語』

1. 「読むこと」と言葉による「見方・考え方」を働かせること

2018年に新『高等学校学習指導要領』が公示された。実施は2022年4月1日以降入学の高校1年生からで年次進行である（一部は移行措置として2019年度より先行実施）。本稿は、新『高等学校学習指導要領』の公示に伴って高等学校国語科に課せられた目標を踏まえ、その目標を達成するための鍵となる用語に着目することで、教材テキストと学習者との関わり方を論じ、その関わり方を具体化し得る古文教材の開発に資する要点を析出しようとするものである。

今回の改訂は、変動の著しい社会を見据えて子供たちの「生きる力」を、主に「経済協力開発機構（OECD）」の掲げる「資質・能力」（＝「コンピテンシー」）として育もうとするねらいがある⁽¹⁾。まず、そのねらいがどのように呼び掛けられているかを確認しよう。以下に掲げるのは『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』に見える「改訂の基本方針」として記された文言である。

教育基本法、学校教育法などを踏まえ、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、生徒が未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す。その際、求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること⁽²⁾。

傍線に示す箇所は本改訂の目標を述べるところである。そこでは「21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指す」という現行（2008-2009年改訂）学習指導要領において掲げられた目標とほぼ重なる目標を掲げていることが分かる。また、それを「一層確実に育成する」としているのが、今回の改訂が現行学習指導要領に掲げられた目標を大枠で踏襲し強化を図ろうとするものであろうことが窺える。他方で、「心豊かでたくましい日本人」を「資質・能力」と言い換える箇所も見え、ここに、特定の教科・科目で得た知識や技能がその特定の教科・科目内部で評価される「コンテンツ・ベース」（何を知っているのか＝内容型）の学習から、教科・科目で身につけた知識や技能の汎用性が問われる「コンピテンシー・ベース」（何ができるのか＝資質・能力型）の学習へと転換する⁽³⁾こと

* 日本語日本文学科専任講師

で学びの枠組みを刷新しようとする本改訂のねらいを慎重に示そうとしたと思しい。傍線に見える「資質・能力」という語は括弧などの記号がつかなければ先天的あるいは後天的に備わる個人の性質を謂う言葉である。だが、直後の一文を見ると、その内実については、予め与えられていたり学校（教育）の側が独自に判断して決定したりするものではなく「求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する」よう促されている。社会でも「求められる」ような汎用性のある知識・技能を「資質・能力」と見做すなら、そのような「資質・能力」観は「コンピテンシー」という術語と合致する。はたして、新学習指導要領は、やや迂遠な記し方ではあるが、現行の学習指導要領とは異なる学びの枠組みを打ち出そうとしているのである。

現行学習指導要領を継承しつつ、学びの枠組みの転換を図ろうとする新学習指導要領。その「改訂の経緯」には、上記の転換に関わったと思しき時代認識が記されている。

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される⁽⁴⁾。

如上、生徒たちが社会に出てから直面するのは、「生産年齢人口の減少」「グローバル化」「技術革新」等による急激な「社会構造や雇用環境」の変化と、変化後の「予測が困難な時代」であり、「成人して社会で活躍する」「今の子供たちやこれから誕生する子供たち」にとって個人や社会が成長するには「厳しい挑戦」にならざるを得ない。そうした時代であると新学習指導要領は説く。従来までの社会のイメージが通用しなくなる時代の到来を述べ、加えて、その社会で生きることが決して楽観できることではないというのである。「知識基盤社会」での個人の活躍と「グローバル化」における他者との共存を説いた現行学習指導要領⁽⁵⁾とは時代認識に多少の重なりが認められるものの、危機意識が顕著に異なる。

従って、これまで通りの学びの枠組み、それは教科・科目それぞれで測定された知識や技能を合算して個人の力とするものだが、それでは「成人して社会で活躍」する力を保証できない。保証し得るとすれば、教科・科目横断あるいは学校教育と社会とを貫く、より汎用性のある「資質・能力」の獲得だというわけである。こうして、「経済協力開発機構（OECD）」が技術革新と国際化を踏まえて旧来の学力観の更新を図り「個人を人生の成功や責任ある人生へと導き、社会を現在と未来の挑戦に対応できるように」⁽⁶⁾ 開発し、今や教育カリキュラムの世界的な潮流を成すに至る「コンピテンシー」。この語を新学習指導要領は目標に組み込み、「求められる資質・能力」への社会的合意（「求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」）に留意するよう促すことで「資質・能力」型（「コンピテンシー・ベース」）の学習への転換を呼び掛けるのである。

こうした改訂の問題意識とねらいの中で、国語科への要請が国語という教科の特性を明確に意識したものとなるのは、教科・科目や学校教育に止まらない汎用力の育成を考えれば当然の結果といえるかも知れない。新たに高等学校国語科では「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」⁽⁷⁾の育成が掲げられている。

この文言の内で取り分け「言葉による見方・考え方を働かせ」は別の箇所以下のように解説される。

「言葉による見方・考え方を働かせ」とは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高め

ることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学の視点から理解することを直接の学習目標としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため、「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながる事となる⁽⁸⁾。

他の教科・科目であれば特定の視点を獲得しその視点に即して何事かを理解することが学習目標となるが、学習者が言葉を相手取る国語科は科学的で体系的な視点の習得及びそれからする解釈の実践を「直接の学習目標としない」教科である。つまり「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が「見方・考え方」⁽⁹⁾であるとするれば、「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている」国語科の場合は、「言葉への自覚」こそ教科固有の「見方・考え方」になるのである。そして、そのような国語という教科の「特質に応じた」、「言葉への自覚」を「高める」(＝「言葉による見方・考え方を働かせ」る)ためには「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり問い直したり」することが必要だという趣旨だろう。「言葉」を教科の特性と任じ、生徒が「言葉」への認識を深め、「言葉」と新たな関わりを築こうとすることを期し、「言葉で表されている話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に意識的に着目して吟味すること」⁽¹⁰⁾でその実現を呼びかけるのである。なるほど、そのような「言葉への自覚の高まり」は確かに「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」を育成することにつながる。

ところで、教材テキストを「読むこと」の学習の場合、「捉えたり」という文言は教材テキストの内容を理解する学習をイメージすればよいとして、「問い直したり」はどうイメージすればよいのだろうか。まさか生徒が教材テキストの表現上の難点を見つけてそれを修正すればよいというわけではないだろう。「国語で的確に理解」するという「資質・能力」の育成の鍵となる「言葉による見方・考え方を働かせ」て読む場合、「問い直したり」とはどのような「読むこと」の学習になるのだろうか。

これについて「国語科の学習としては、単に個々の文章の主張を把握させて意見をもたせ」たり「単にあらすじを把握させ」たりして教材テキストの主張への意見や主題への共感・同感を働きかけるのではなく、説明文や物語の成り立ち(「構成」「仕掛け」)に着目して検討させるような「読むこと」の学習を示唆する意見がある⁽¹¹⁾。

(環境に関する説明文や評論を例に)国語科の学習としては、単に個々の文章の主張を把握させて意見をもたせるのではなく、それらの主張の説得力がどのような根拠を用い、どのような構成や表現の仕方により高められているかなどの点に着目させることが重要となる。場合によっては、同じ立場のほぼ同じ主張の専門家の文章を比較させ、双方の文章の説得力の違いがどのような「言葉の用いられ方」によるものなのかを検討させる学習も効果的かも知れない。…(中略)…(物語教材の一例としてヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」を取り上げ)その心情がどのような言葉で表現されているか、類似の他の言葉で表現されていた場合、何がどう変わってくるのかについて考えさせたり、物語の構成という観点から、回想という仕掛けが物語全体にどのような効果を上げているか、…(中略)…「言葉」に着目させながら話し合ったりすることなどが考えられる。(※()内稿者)

すなわち、教材テキストの構成・表現手法・言葉の用い方という諸観点から生徒と教材テキストとを出会わせ、説得力や語りの効果を探ったり検討したりする学習に向かおうとする主張である。その他にも「読むこと」の領域で生徒たちが何を「捉えたり」どう「問い直したり」するのかについて教

わることが多い意見で、「言葉による見方・考え方を働かせ」という用語を踏まえた授業作りの方向性が明確に示されている。だが一方で、「問い直したり」という文言に、説得の強度や語りの技巧といった書き手の工夫を検討するようなタイプの学習だけを含意させ、一見すると主張や主題の検討をそこから外しているように読めるのはもったいない。もちろん論者も引用末尾で「話し合ったりすることなど」としているのですがそればかりをイメージしているわけではないと判断できるが、書き手や登場人物の特定の世界観・価値観とのつきあい方という点から何らかの工夫で以て伝えられる主張や主題そのものを生徒たちが検討するようなタイプの学習までをもそこに含まなければ学習指導要領解説に示された国語科の「特質」を活かすことにはならないだろう。

国語という教科の「特質」は、特定の科学的視点を有する他の教科とは異なり「言葉」を基本単位とするところに本性がある、と説くのが先掲の学習指導要領解説だ。そして、言葉とは何らかの視点や世界観、価値観を媒介するものだとしたら、国語科は、そうした言葉に即して社会／自然科学的視点も含む種々様々な世界観や価値観からする主張や主題を「捉えたり」、それらを「問い直したり」することのできる⁽¹²⁾、比較的自由な立ち位置にあるということだろう。そのような国語科の「特質」を活かさないのはもったいない。学習の中で言葉や表現に即して書き手や登場人物がいかなる世界観・価値観といかに関わり、どういった主張や主題を呼び掛けるのかを吟味・検討し、そうした学習を通して自らの言葉及び世界観・価値観との関わりを捉え直すことは、本改訂の問題意識にあった「質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくこと」にも適う。加えて、言葉をベースにして自己や他者の世界観・価値観とのつきあい方を吟味検討することは社会に出たら不要になるようなことでは決してない。異なる世界観・価値観にある他者と共により良く生きようとして互いに了解できる世界観・価値観を折々に言葉を通して創造し続けることは生徒に限らず我々の日常だからだ。教材テキストやそこで語られる登場人物の世界観・価値観とのつきあい方を吟味・検討することは学校教育と社会とを貫く汎用性のある「資質・能力」の育成を掲げる本改訂のねらいも担保できる。このように「問い直したり」という新学習指導要領解説の文言を引き受けつつ⁽¹³⁾、「言葉による見方・考え方を働かせ」で「読むこと」の学習における、生徒たちが教材テキストや登場人物の世界観・価値観とのつきあい方を検討する局面の重要性を鑑みて、その実現に向けた教材開発の要点を明らかにするのが本稿の目的である。

2. 「筒井筒の恋」

『源氏物語』の夕霧と雲居雁夫婦の話題には、特定の世界観・価値観と一体化した夕霧がそれとの関わり方に失敗し窮地に陥る姿が描かれており、そうした語り口は、物語を「読むこと」で登場人物の世界観・価値観を「捉えたり」、関わり方という点で「問い直したり」する格好の材料となろう。では、夕霧と雲居雁夫婦の物語はいかに語られているのだろうか。以下にその語られ方の特徴を、「色好み」の共有する世界観・価値観に注目しつつ分析し明らかにしていこう。

『源氏物語』に登場する夕霧と雲居雁夫婦は物語テキストにおいて独特な過程を経て結ばれた夫婦である。二人の出会いは、夕霧の父・光源氏にとっては義理の母で、雲居雁の父・頭中将にとっては実の母である、大宮の屋敷である。夕霧は亡くなった実母の実家であるため、雲居雁は皇族出身である大宮の元で行儀・教養を身に付けるため、それぞれ養育されていたのである。共に育てられるうちに幼い二人は相思相愛の仲になるのだが、ある日、雲居雁の父が二人の仲を噂する女房たちの言葉を聞きつけ、怒って雲居雁を自邸に引き取り二人を隔てる（「少女」巻）。先に入内した娘（弘徽殿女御）が光源氏の後見する斎宮女御（六条御息所の娘で、立后して秋好中宮と呼称）との立后競争に敗れて

いるので、次なる機会、それは朱雀院第一皇子である東宮への入内だが、にわかに入内候補者となった雲居雁は、雲居雁の父にとって自家の趨勢を託した娘だったからだ。こうして二人は長い時間隔てられることになる。転機は、6年という時間の経過と恋仲の噂の広がり、夕霧の縁談の噂であった。雲居雁の行く末を案じた頭中将がついに二人の仲を許し、結婚を認めたのだ（「藤裏葉」巻）。

こうした二人の結ばれ方を指して、幼馴染みの美しい相思相愛が結婚に至る『伊勢物語』『筒井筒』との近縁関係を説く先行研究は多く、確かに、出会いから一途に相手を思い合って「つひに本意のごとくあひにけ」⁽¹⁴⁾る二人の恋は「筒井筒の恋」と呼ばれるに相応しい。物語世界においても「つひに本意」を叶えた夕霧の一途さは結婚後も変わらない雲居雁への思いを証し立てるものとして受け止められている。

中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろも、かのわたりに心をかけて、ほかざまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに、その思ひ叶ひては、いとど揺るぐ方はべらじ⁽¹⁵⁾。

中納言となった夕霧が女三宮の婿候補として朱雀院の思案に上った際、女三宮に仕える女房の口から、夕霧と雲居雁の、格別の夫婦仲が語り出される。夕霧という男はそもそも真面目な人柄（「まめ人」）で、結婚してからこの方、雲居雁（「かのわたり」）へ思いを寄せてそれが他の女性に移るようなことは無かったし、その上、長年の思いが叶って結ばれた経緯もあるので揺らぎようがないというのである。幼少の頃から抱く雲居雁への「その思ひ」がようやく「叶ひ」結ばれた結婚の経緯をこの女房は知る。夕霧の義理の父・頭中将の正妻（四君）は朱雀院の母である弘徽殿太后の妹だから、その筋から手にした情報であろうか。ともあれ、貴顕の家に仕える女房はそこで見聞きした出来事を女房同士で伝え合い批評する。主人と思ひ定めた姫君に仕えつつ致し方なく兼業として別の姫君に仕える『落窪物語』のあこぎのような女房もいる。お家の事情をあれこれと取り沙汰したい女房たちの、隅々にまで広がったネットワークを駆け巡って「筒井筒の恋」は瞬く間に伝播したのだろう。こうしてこの女房は雲居雁に対する夕霧の確かな思いを口にしてしているのである。なるほど、「まめ人」という登場当初から夕霧を象る人柄と物語のような恋とを知れば、誰しも揺らぎのない思いを予想せずにはいられない。事実、夫としての夕霧は雲居雁一人を妻と据え浮気めいた素振りを見せず、雲居雁に対して実直であった。一方の雲居雁は、夕霧との間にたくさん子どもをもうけ、かつては結婚以前に夕霧が関係を持った藤内侍を許しがたく思うこともあったようだが、今となっては夫の女性関係で千々に心をかき乱されることもなく、落ち着いて育児に専念できていた。「筒井筒の恋」を経て結ばれた夕霧と雲居雁は子たくさんで騒々しくはあったが気兼ねのない夫婦仲で穏やかな家庭を築く。但し、それは、夕霧が柏木と死別するまでのことである。

3. 「まめ人」に兆す「色好み」

夕霧にとって柏木はともに高家に生まれた年頃の近しい友である。落葉宮（女二宮）という皇女を妻に迎えながらも女三宮への恋情が抑えられない友を奇異に思いつつ、やがてその恋情が原因となって没する柏木から落葉宮の後見を依頼されると当然引き受けた（「柏木」巻）。彼が亡くなると「まめ人」振りを発揮して主を喪って間もない未だに故人に縁のものが目につく一条邸を弔問したり、故柏木の法要に尽力したりして誠実に後見するのである。ところが、一条邸は情趣深い恋を期待する「色

好み」にとって落ち着いていられないような様相を呈しており、それはこれまで「色好み」の世界観・価値観とは無縁であった夕霧にも強力に働きかけていたのである。

秋の夕べのものあはれなるに、一条宮を思ひやりきこえたまひて渡りたまへり。うちとけしめやかに御琴どもなど弾きたまふほどなるべし。…（中略）…例の、御息所対面したまひて、昔の物語ども聞こえかはしたまふ。わが御殿の、明け暮れ人繁くてもの騒がしく、幼き君たちなどすだきあわてたまふにならひたまひて、いと静かにもものあはれなり。うち荒れたる心地すれど、あてに気高く住みなしたまひて、前栽の花ども、虫の音しげき野辺と乱れたる夕映えを見わたしたまふ。和琴を引き寄せたまへれば、律に調べられて、いとよく弾きならしたる、人香にしみてなつかしうおぼゆ。「かやうなるあたりに、思ひのままなるすき心ある人は、静むることなくて、さまあしきけはひをもあらはし、さるまじき名をも立つるぞかし」など、思ひつづけつつ掻き鳴らしたまふ。（「横笛」巻63頁）

物語上では三度目の弔問である。夕霧は「秋の夕べ」の趣深さをきっかけとして「一条宮」（落葉宮）に思いを致し出かける。すると、ちょうど一条邸ではくつろいで琴の演奏をしているところであった。いつものように落葉宮の母・御息所が応接するので、彼女を相手に故柏木の昔話を語らう。邸内の様子は、我が家と違って静かで風情に溢れている。というのも、上品さを損なわないように気高く構えているとはいえ、男主人を最近喪った屋敷である。手入れの行き届かない所もある。そのような前栽の花の乱れ咲く様子は、まさに「虫の音しげき野辺」という和歌（「君が植ゑし一群薄虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」（『古今和歌集』「哀傷」御春有助））通りの哀愁を漂わせていたからだ。その情趣に誘われるように自らも琴を引き寄せ爪弾き、その琴の持ち主である落葉宮の香りを嗅ぎ取って親しみ深く感じ入るのである。一方で、このような情趣深い邸宅（「かやうなるあたり」）でこそ勝手気ままな「すき心ある人」（＝「色好み」）は姫君への関心が抑えきれずに好色めいたことに及ぶのだろうとも思う。

夕霧の思う「かやうなるあたり」とは、傍線に示すごとく、人気なく静かで荒れた庭からは虫の声が乱れ聞こえ、邸内からは琴の音が聞こえてくるような屋敷のことである。また、そのような場所で「すき心ある人」（＝「色好み」）が情趣深い恋を期待して「さまあしきけはひをもあらは」す話は先行する王朝物語に散見される。夕霧が参照していたのは例えば以下に挙げるような「色好み」の姿だったろうか。

秋風・河原風交じりて、早く、叢に虫の声乱れて聞こゆ。月、隈なうあはれなり。人の声、聞こえず。かかる所に住むらむ人を思ひやりて、独り言に、

「虫だにもあまた声せぬ浅茅生に一人住むらむ人をこそ思へ」

とて、深き草を分け入り給ひて、屋のもとに立ち寄り給へれど、人も見えず。ただ薄のみ、いとおもしろくて招く。隈なう見ゆれば、なほ近く寄り給ふ。東面の格子、一間上げて、琴をみそかに弾く人有り。立ち寄り給へば、入りぬ⁽¹⁶⁾。

若子君（兼雅）は日中に見かけて気になった屋敷に夜になってから訪れる。はたしてその邸宅は「人の声、聞こえず」「叢に虫の声乱れて聞こゆ」というもので、折しも情趣を添えるように「琴をみそか

に弾く」音が聞こえてくる（傍線）。情趣深い屋敷の様子と「かかる所に住むらむ」姫君への関心が抑えきれずに邸内に「なほ近く寄り」、さらに琴の音に触発されてとうとう邸内へと侵入する。そのような「色好み」の姿である。この後、若子君はそこに暮らす姫君（俊蔭の娘）と関係を持つのだが、夕霧が思うように「かやうなるあたり」で情趣深い恋への期待を抑えきれない「すき心ある人」（＝「色好み」）は確かに見える。趣深い屋敷に住む姫君への関心が「色好み」には抑えられないのである。

先掲の夕霧弔問場面で注意すべきは、夕霧が一条邸を訪れたのは「秋の夕べのものあはれなる」風情をきっかけとしていることである。これは夕霧にとって落葉宮の哀しみの深まりを思いやるきっかけでもあったが、一層情趣を深めたであろう一条邸の様子を期待させることでもあった。というのも、これに先立つ四月の一条邸弔問で夕霧は「前裁に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一叢薄も頼もしげにひろご」る邸内を眺め、先取りするように「虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとあはれに」感じ入っていたからだ（「柏木」巻 49 頁）。つまり、夕霧は秋の一条邸の様相にそもそも関心を寄せていたのである。また、落葉宮の琴を弾きながらその琴の主の香りを嗅ぎ取って、姫君の気配を探ろうと夕霧はしてもいた。このような夕霧の様子には、情趣深い屋敷に住む姫君に関心を持ち、琴の音や姫君の香り、衣擦れの音、書き散らした手すさびといったあらゆるものを手がかりにして姫君その人を知ろうとする「色好み」の相貌が兆していよう。夕霧は、「かやうなるあたりに～」と他人事のように「すき心ある人」（＝「色好み」）一般の癖を指摘してみせるが、既に当人の関心の持ち方や行動は「色好み」のそれをなぞっているのである。若子君との違いは抑えているか抑えていないかであって、それは半歩の異なりでしかない。

4. 「好き心」に「思ひ焦らるる」夕霧

ところで、なぜ「色好み」たちは荒廃した屋敷で情趣深い恋を期待するのだろうか。邸内の趣深い景観は恋の情趣の背景をなす。とはいえ、そこに情趣深い恋に相応しい姫君がいるかどうかは別の問題だ。それを勘違いして失敗する「色好み」の話もある（『源氏物語』の光源氏と末摘花など）。背景は姫君までをも保証しない。しかし、どうもそこには以下のような見通しが「色好み」たちにはあったようなのだ。

さやうなる住まひする人は、もの思ひ知りたる気色、はかなき木草、空のけしきにつけてもとりなしなどして、心ばせ推しはからるるをりをりあらむこそあはれなるべけれ。（「末摘花」巻 19 頁）

頭中将は、故常陸宮の娘・末摘花から手紙の返事が全く来ないことに焦れて上掲のように不満を漏らす。末摘花は父の遺した荒れ果てた邸宅に人知れず暮らす姫君である。それなのに、彼女からは何の返事も来ない。当てが外れてがっかりだというのである。なぜなら、そのように荒廃した屋敷に暮らす姫君は、こちらの恋の苦悩への理解を、覆い茂る木草や月、夕べ、雨、風、雪などといった空の様子にかこつけて手紙や和歌に託して寄越すはずで、そのような反応があればこそこちらが相手の気持ちや自ずと推察できる機会ともなろうし、なにより姫君の思いを手紙や和歌から推し量る瞬間にこそ恋の情趣が感じられもするからだ。つまり、趣のある事物に囲まれて過ごす姫君は、そうした事物に託して思いの交流ができるはずだと見通されているのである。ところが末摘花は何も寄越さない。

背景たる屋敷の景観はばっちりなのに、見通しが狂って姫君との情趣深い交流を経験できない男の呻きは、荒廃した屋敷に住む姫君をいかに「色好み」が捉えていたかをよく伝える。

その点、落葉宮は申し分ない。育ちの良さは折り紙付きの皇女である。また、母・御息所は宮仕への折には当世風の風流人で通った女性であるからまさかその娘が風流を解せないはずはなかろうとの予想もつく。さらに、背景たる一条邸の様子はほどよく荒れているのである。そのように整えられた状況の中で「まめ人」夕霧がいつの間にか「色好み」の世界観・価値観をなぞるようになったとしても仕方がないことかも知れない。それに、夕霧に隙が無かったわけではない。というのも、一条邸の「いと静かにもものあはれな」る様子と自邸の「明け暮れ人繁くてももの騒がしく、幼き君たちなどすだきあわてたまふ」様子とを比較しているように、自分の日常、取り分け妻である雲居雁との間で風情が無いことに不満を持っていた（「若菜下」巻）からだ。その不満を入り口にして、染み込むように「色好み」の世界観・価値観が「まめ人」夕霧に取り憑いたのである。

八月中の十日ばかりなれば、野辺のけしきもをかしきころなるに、山里のありさまのいとゆかしければ、…（後略）…。（「夕霧」巻 99 頁）

先の訪問から1年近く時間が経ち、落葉宮は母・御息所の病氣療養のため、一条邸から小野の山荘に移り住む。上掲はその「山里」に出立を思いつく夕霧の様子である。ここでも、夕霧は「野辺のけしきもをかしき」頃合いになると落葉宮の住む「山里のありさま」が気になって出かけようとする。人里離れた「山里」の「いと静かにもものあはれな」る情趣は洛中にある一条邸のそれとは比較にならない。そして、もちろん、情趣深い景観を背景にして期待しているのは、自分の思いを相手に何とかして伝えようとしたり、その反応から相手の気持ちを推し量ったりすること、つまり恋の情趣である。事実、夕霧はこの訪問で「山里」の情趣に恋情をかき立てられ逗留を決意して「山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して」（「夕霧」巻 103 頁）と宮に詠みかけ、その後はっきりと言葉にして胸中を訴える。のみならず、息を潜める落葉宮の態度に焦れ思い余って御簾の内に侵入するのである。落葉宮が激しく拒絶したために実事には及ばなかったが、情趣深い恋に自制心を失った「色好み」としての夕霧がはっきりと認められる。

こうして、夕霧は自らも不思議に思うほど落葉宮との恋に夢中になる。

「人の上などにて、かやうのすき心思ひ焦らるるは、もどかしう、うつし心ならぬことに見聞きしかど、身の事にては、げにいとたへがたかるべきわざなりけり。あやしや。などかうしも思ふべき心焦られぞ」と思ひ返したまへど、えしもかなはず。（「夕霧」巻 144 頁）

元来「まめ人」である夕霧にとって、「すき心思ひ焦らるる」「色好み」たちの行動様式は「もどかしう、うつし心ならぬこと」と批判する対象であって、あくまで「人の上」のことであった。ところが、いざ自分が「色好み」の世界観・価値観を身に付け実践すると、抑えようなく「すき心」に「思ひ焦らるる」のである。はたして、どれほど落葉宮から頑なに拒絶されても、いくら雲居雁から愁嘆や詰問を浴びせかけられても、夕霧は抑えられなかった。夕霧は一条邸に自分の部屋を拵え邸内を整え直して、一条邸の主人が誰かを世間に知らしめた上で落葉宮を迎え取ろうと決意するのである。落

葉宮の拒絶が全く変わらなかったのが、事態の好転を図って事実上の結婚を狙ったのだ。結婚という形が整い周囲も認めてしまえば頑なな落葉宮も自分に振り向いてくれるに違いない。このように思い込む夕霧の姿には雲居雁一人を妻とする実直で落ち着いた男の面影はない。「すき心」に「思ひ焦らるる」ままに、執着する姫君との関係の深まりをただひたすら期待する「色好み」らしさが認められるだけだ。このように、「色好み」の世界観・価値観と距離を取りつつも、いつしかそれをなぞり始めた夕霧は、情趣深い恋の誘惑に自制心を失い、とうとう「すき心」に身を委ね「色好み」よろしく恋の成就をひたすら追い求めるようになるのである。

5. 夕霧の問題点

この間の夕霧は世界観・価値観との関わり方という点で見過ごせないような振る舞いを見せている。例えば落葉宮と「想夫恋」の合奏を果たして夜深く帰宅した折の夕霧の姿を見てみよう。

殿に帰りたまへれば、格子など下ろさせて、みな寝たまひにけり。この宮に心かけきこえたまひて、かくねむごろがりきこえたまふぞなど人の聞こえ知らせたれば、かやうに夜更かしたまふもなま憎くて、入りたまふをも聞く聞く寝たるやうにてものしたまふなるべし。「妹と我といるさの山の」と、声はいとをかしうて、独りごちうたひて、「こは、など。かく鎖し固めたる。あな埋れや。今宵の月を見ぬ里もありけり」とうめきたまふ。格子上げさせたまひて、御簾巻き上げなどしたまひて、端近く臥したまへり。「かかる夜の月に、心やすく夢見る人はあるものか。すこし出でたまへ。あな心憂」など聞こえたまへど、心やましようち思ひて、聞き忍びたまふ。（「横笛」巻67-68頁）

大宮の元で琴を習い損なった雲居雁は夕霧の前で琴の演奏をすることがなかったので夕霧にとって落葉宮との琴の合奏は風情ある夫婦の仲らいが感じられて格別だったろう。帰宅すると「妹と我といるさの山の」と「催馬楽」（「妹与我」）を口ずさみ、見事な月夜にも関わらず戸締まりをして寝静まっている我が家を嘆きつつ「格子上げさせたまひて、御簾巻き上げなどしたまひて、端近く臥し」て月を愛でようとするのである。流行歌を口ずさみ、月の風情を鑑賞しようとする夕霧には先ほどまでの落葉宮との恋の情趣が色濃く漂っていよう。そればかりか、この場面では風情ある月を見もせず休んでいる雲居雁を非難し「すこし出でたまへ」と月見に誘ってもいる。風情とは無縁だと思っているはずの妻にまで自らが身に付けた「色好み」の世界観・価値観を強要するのである。この強要も見過ごせないが、『「今宵の月を見ぬ里もありけり」とうめ」いたり、「かかる夜の月に、心やすく夢見る人はあるものか」「あな心憂」と非難したりするところもまた見過ごせない。「色好み」の世界観・価値観を我が家にまで引きずって持ち込んだ夕霧はその観点に即して我が家や雲居雁の有り様を評価しているからだ。むろんその評価は無粋（「うめき」「あな心憂」）というものであろう。さらにその直後に夕霧は以下のように我が家を眺める。

君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなどここかしこにうちして、女房もさしこみて臥したる、人げにぎははしきに、ありつる所のありさま思ひあはするに、多く変りたり。（「横笛」巻68頁）

幼子たちのあどけなく寝ぼけている声があちこちから聞こえるし、その上その子らを寝かしつけながら寝入ってしまった女房も込み合っている。そのような我が家の有り様を「人げにぎははしき」所と理解し、すぐさま「いと静かでものあはれな」る一条邸（「ありつる所」）の有り様と引き比べて両者の異なりの多さを確認するのだ。この異なりの確認は、一条邸の情趣を良きものと見做している夕霧にとっては、我が家の風情の無さへの負の評価か、「人げにぎははしき」我が家を踏まえた上での「あはれな」る一条邸への正の評価か、いずれにせよ「あはれな」らざる「人げにぎははしき」我が家への負の評価を含むものだったろう。

このように我が家や雲居雁を夕霧は「色好み」の世界観・価値観に即して評価する。だが、子だくさんで「人げにぎははしき」我が家や夫の色恋沙汰とは無縁の雲居雁は夕霧が「まめ人」として10年の時間をかけて築いた結果、そのような形に定まってしまった事柄である。換言すれば、「色好み」の世界観・価値観とは異なる他者である。それは、夫に対して意地が悪く無愛想だと夕霧から非難されることへの、雲居雁の反駁も証言するところだ。曰く、夕霧がいくら「心よからずあいだちなきもの」と自分を思ったところで、それは大勢の妻妾の内の一人として過ごした経験が自分に無いためあって「我も、むかしよりしかならひなましかば、人目も馴れてなかなか過ぐしてまし、もうどうしようもないことだ（「わりなしや」）、と（「夕霧」巻142頁）。加えて雲居雁には風情や情趣といった若々しい振る舞いに耐えられない老いの意識もある（「もののはえはえしき作り出でたまふほど、古りぬる人苦しや」（「夕霧」巻123頁）。これまでも夫の気を引いたり浮気に奥ゆかしく耐えたりすることなく過ごしてきたし、これからもそのようなことは年齢に相応しくないのですつもりはないのである。どう考えても、雲居雁は「めでたきさまになまめいたまへらむあたりにあり経べき身」（「夕霧」巻158頁）ではない。ところが落葉宮との情趣深い恋に夢中になっている夕霧はそのような他者にまで「色好み」の尺度を適用し、強要するのである。

また、「色好み」がそうであるようにその世界観・価値観に依って立つ夕霧にとっても恋人との関係の深まりは最大の関心事である。夕霧は自邸（三条邸）であっても誰憚ることなく落葉宮との恋の行方に懊惱し（「殿におはしても、月を見つつ、心は空にあくがれ」（「夕霧」巻142頁））たり、雲居雁が側で休んでいても宮への手紙に添える和歌の出来映えを確かめるように和歌を声に出し（「うち置きてうそぶき」（「夕霧」巻143頁））たりする。そのせいで立腹した雲居雁に手紙を奪い取られるようなこともあったが止むことは無い。

さらに、情趣深い恋に生きる「色好み」としての夕霧は雲居雁の誹りや嘆きを慰める時ですら落葉宮との恋のことばかりを思ってしまう。

何くれとこしらへきこえ慰めたまへば、いと若やかに心うつくしう、らうたき心はたおはする人なれば、なほざり言とは見たまひながら、おのづからなごみつものしたまふを、いとあはれと思すものから、心は空にて、…（後略）…。（「夕霧」巻159頁）

雲居雁との激しい口論の末、「何くれとこしらへ」慰めながらも、一方で「心は空にて」、一条邸に迎えた落葉宮の頑なな態度に出家を危惧して心配で頭がいっぱいなのだ。あるいは、一条邸に出立す

るため「めでたうつくろひ化粧じて出でたまふ」夕霧の様子を見て涙ながらに雲居雁が出家したいとの独り言を漏らすと、

立ち止まりて、「さも心憂き御心かな。

松島の海人の濡衣なれぬとて脱ぎ替へつてふ名を立ためやは」

うち急ぎて、いとなほなほしや。（「夕霧」巻 160 頁）

聞き止めて慰めの言葉と返歌を雲居雁に送りはするが、語り手が「うち急ぎて、いとなほなほしや」とその出来映えを評すように、一条邸出立に気がせいしているためおぞなりの慰めであったようだ。

自らの拠って立つ世界観・価値観に相応しくなければ低く評価し、それからする関心の対象でなければ居ないことと同じで、仮に関心の外にある他者が憤りの声を上げても関心事が頭を占めているのでその場しのぎで対応する。このような夕霧の姿は、特定の世界観・価値観と一体化しすぎると、どれほど異なる世界観・価値観の他者に無関心になってしまうかをよく伝えていよう。

6. 「もの懲り」する夕霧

『源氏物語』テキストはこの夕霧の無関心を許さない。一条邸に落葉宮を妻として迎え取り主人顔して夕霧がとうとう住み着き始めると、雲居雁は夫婦仲の終わりを「限りなめり」と悟り、夕霧の無関心（「まめ人の心変るはなごりなく」）を確信し、無礼な夫の態度に耐えかねて数人の子供を残し実家に帰ってしまうだ（「夕霧」巻 165-166 頁）。雲居雁の父・頭中将は光源氏と政界を二分するほどの権勢家の家長である。「筒井筒の恋」を経た二人の結婚には政略結婚の意味合いは無い。だが、結果的に両家の蝶番の役割を担ってしまっている。蝶番が無くなるだけならまだしも両家の不和を招きかねない。雲居雁が実家に帰って三条邸に戻らないことはそのようなことを意味する。加えて、頭中将はせっかちな性格である。かつて二人の噂を聞いて怒りのあまりに突然雲居雁を引き取ったように、両家の行き来を決定的に途絶えさせる直情的な対応は十分予想できる。そもそも外聞も悪い。だから夕霧は妻の実家を訪問し宥めたりすかしたりして帰宅の説得を試みるのだが雲居雁は取りつく島もない。その上、一条邸を改装して妻として迎え取った落葉宮は相変わらず夕霧に冷淡なので「色好み」として恋の情趣を耽溺できそうもない。夫としてどこにも居着けなくなった、まさに宙ぶらりんの状態である。このように『源氏物語』テキストは、雲居雁との夫婦関係も失いかげ、落葉宮からも相手にされない、進退窮まった状況に夕霧を追い詰めていくのである。

その状況を指して夕霧自らが「あやしう中空なるころかな」と思う場面が認められる。

「あやしう中空なるころかな」と思ひつつ、君たちを前に臥せたまひて、かしこにまた、いかに思し乱るらむさま、思ひやりきこえ、やすからぬ心尽くしなれば、「いかなる人、かうやうなることをかしうおぼゆるむ」など、物懲りしぬべうおぼえたまふ。（「夕霧」巻 167 頁）

雲居雁の説得に失敗し共寝を拒絶されて仕方なく子供たちを前に頭中将の屋敷で休もうとする夕霧の様子である。どこにも居着けない「中空なる」我が身を的確に捉えてもいるが、そうは思っても、何らかの方針転換が考えられるわけでもない。相も変わらず落葉宮（＝「かしこ」）のことが気になりになってしまう。「好き心」に「思ひ焦らるる」ことが止められないのだ。しかし『源氏物語』テキス

トはここに至って夕霧を正気に返らせる。どれほど窮しても襲ってくる「すき心」を前にして、どんな物好きがこのような色恋沙汰に興味のあることと思うのだろうか、ついに懲り懲りする。そのような夕霧を描出するのである。

7. まとめ

我に返った夕霧が本当に「色好み」の世界観・価値観から離脱したのかは実は分からない。テキストは「この御仲らひのこと言ひやる方なくとぞ」（「夕霧」巻 171 頁）として家庭争議の行く末を省筆するからだ。但し、状況証拠を並べれば、夕霧が本来の「まめ人」ぶりを取り戻したと判断できそう。光源氏の死後、月の半分ずつ雲居雁と落葉宮の元に通う夕霧の姿（「匂宮」巻）や、権勢家の正妻らしく我が子の結婚話に活躍する雲居雁の姿（「竹河」巻）が認められるのである。少なくとも夫婦関係は破綻していない。予想でしかないが、おそらく夕霧は「色好み」の世界観・価値観に嫌気がさしてからは、襲い来る「すき心」を抑えつつ雲居雁と誠実に向き合い時間をかけて夫婦の仲を修復していったのだろう。ともあれ、「いかなる人、かうやうなることをかしようおぼゆるむ」と夕霧が思った時点で家庭争議の勝敗は決したようである。

このように『源氏物語』テキストは、「まめ人」夕霧に「色好み」の世界観・価値観を「うつし心ならぬ」ほど過剰になぞらせた上で窮地に陥れ、結果「色好み」の世界観・価値観から離脱するに至る夕霧を描くことで、特定の世界観・価値観を絶対化してしまった夕霧の在り方を批判的に読み手に差し出そうとするのである。あるいはまた、そのような「うつし心ならぬ」様を、『源氏物語』テキストは夕霧の姿を通して問い掛け、異なる世界観・価値観の他者への無関心という一つの問題点を開示するのである。こうしたテキストの語りに学習者が参入し、表現に即して夕霧に取り憑いた世界観・価値観や夕霧の世界観・価値観とのつきあい方を「捉えたり問い直したり」する。本稿が「言葉による見方・考え方を働かせ」て「読むこと」の学習において思い描く古文学習とはそのようなものである。ただし、本稿はそうした古文学習に向けて教材開発の目途を立てる要点析出に止まる。具体的にどの場面を教材化し、その教材を用いたいかなる授業実践が、どの程度学習者の「言葉への自覚を高め」、どのように「言葉への自覚の高」まりに寄与するのかは見届けなければならない。稿を改めて取り組むべき課題としたい。

注・引用文献

- (1) 文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と 評価の在り方に関する検討会—論点整理—【主なポイント】（平成 26 年 3 月 31 日取りまとめ）」（同省 HP 登録：2014 年 6 月）や国立教育政策研究所（研究代表者：勝野頼彦）「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 5 社会 の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則〔改訂版〕」（2013 年 3 月）など。

なお、文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と 評価の在り方に関する検討会—論点整理—【主なポイント】（平成 26 年 3 月 31 日取りまとめ）」の掲載された HP は下記の通り。

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/06/03/1346335_01_1.pdf

- (2) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』，東洋館出版社，2019年2月21日，2頁。但し、「改訂の基本方針」は三項目で成り，引用はそのうちの一項目だが，その他の項目は現行学習指導要領の継承と発展を述べるに止まり，用語の異なりなどに含意するところはないと判断したため省略している。
- (3) 先掲注(1)同書。例えば文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会－論点整理－【主なポイント】（平成26年3月31日取りまとめ）」では「学習を通じて「何ができるようになったか」よりも，「知識として何を知ったか」が重視されがちとなり，また，各教科等を横断する汎用的な能力の育成を意識した取組も不十分」（1頁）との指摘がなされ，既に国立教育政策研究所『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』には社会変化に対応できる能力を「21世紀型能力」として「21世紀型能力をすべての教科等に共通する汎用的能力として明確に示すことで，「世の中について何を知っているか」から「世の中に対して何ができるか」へと教育のあり方を転換し，教育の内容，方法，評価の改善を促す」（30頁）ことが提言されている。
- (4) 先掲注(2)同書，1頁。
- (5) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』，教育出版，2010年6月，1頁。そこには「改訂の経緯」として「21世紀には，新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す，いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会化やグローバル化は，アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で，異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において，確かな学力，豊かな心，健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。」（1頁）と見える。
- (6) ドミニク・S・ライチェン，ローラ・H・サルガニク〔編著〕/立田慶裕〔監訳〕『キー・コンピテンシー - 国際標準の学力をめざして』，明石書店，2006年5月31日，24-25頁。
- (7) 先掲注(2)同書，21頁。
- (8) 先掲注(2)同書，23頁。
- (9) 中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」，2016年12月21日，33頁。
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- (10) 菊池英慈「言葉に着目し，言葉を吟味し，言葉への自覚を高める」『教育科学国語教育』9(837)，明治図書，2019年9月1日，8頁。
- (11) 大滝一登「「言葉」に意識的に向き合わせる指導の必要性」先掲注(10)同書，14頁。
- (12) 鈴木一史「世界を切り取る語彙・繋ぐ語彙」先掲注(10)同書，48頁-51頁。鈴木氏は「言葉が世界を切り取っていることは間違い」ないので学習指導要領解説では直接の学習目標としないとされていた「自然科学や社会科学の視点」だが，むしろ積極的に「自然科学や社会科学がどのような言葉で切り取られているかを考えることこそ，言葉による見方・考え方」だと主張している（51頁）。「自然科学や社会科学の視点」という特定の世界観を独特の語彙の面から捉えさせようとする興味深い提案で本稿もほぼ立場を同じくするが，一方で本稿は「自然科学や社会科学の視点」に止まらずそれをも含む意味で世界観・価値観なる語を用いているので「自然科学や社会科学の視点」だけを「読むこと」の学習対象とはしない。
- (13) 宗我部義則「述べ方（レトリック）への自覚を高めて鍛える」先掲注(10)同書，32頁-35頁。宗我部氏は「述べ方やレトリック」に着目して「読むこと」は特定の「言葉の組み合わせ（語の選択，述べ方の工夫）をした作者が何を捉えているのか，何を描いているのか，という作者の世界認識の仕方を読んでいると言え」，「それは，自分たちはどの言葉とどの言葉にどんな意味を受け取るのか，ということと裏表」だと指摘している（35頁）。氏の主張は「述べ方やレトリックに対する自覚を促すことが」「言葉による見方・考え方を働かせる」授業の「鍵にな

る」とするので、先掲注(11)で取り上げた大滝一登氏の主張に重なるが、「述べ方」や説明の仕方、物語の仕組みといった書き手の工夫を捉えることは不可欠だが、そうした工夫を捉える先には書き手の「世界認識」(＝世界観・価値観)を捉えることがあるとする。首肯したい。

- (14) 小学館新編日本古典文学全集 12『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』, 小学館, 1994年12月20日, 136頁。
- (15) 小学館完訳日本の古典『源氏物語』, 小学館, 1989年4月1日, 「若菜上」巻19-20頁。これより以下, 本論文では『源氏物語』本文を頻繁に引用するので, 『源氏物語』に限り出典掲出は論文本文引用末尾に巻名とページ数を示す。
- (16) 室城秀之〔校注〕『うつほ物語 全 改訂版』, おうふう, 2001年10月20日, 「俊蔭」巻25頁。